

既製幼児服下衣のウエスト部に関する研究

高部啓子・森川 瞳・高橋佐智子

生活環境学科 アパレルデザイン研究室

A Study on Waist Area Construction of the Ready-Made Pants and Skirts for Children

Hiroko TAKABU, Hitomi MORIKAWA and Sachiko TAKAHASHI

Apparel Design Laboratory

Our study was aimed to clarify the actual situation of waist area construction of ready-made children's pants and skirts, and the mothers buying behavior and their consciousness to children's clothes, and how mothers dress their children and the problems which control us. We investigated them through a market research, a wearing test and a questionnaire study. The main results are as follows.

1. By the market research, there were 5 kinds of construction styles: two of them were adjustable to each waist and three of them were not. Adjustable pants and skirts tended to be handled by the department stores, and non-adjustable ones by the volume sales stores.

2. By the wearing test, though the pants size matched the child, the pants were too tight for the child's waist. It showed the necessity for the adjustable pants waist specification.

3. The mothers mainly used the volume sales stores and the mail order sales (including Internet sales). They bought their children's clothes attaching greater importance to economical and design matters than to functional ones. They thought that the waist construction was an adjustable specification and made by rubber, that the hook was better than the button, and pants' waist was made by rubber rather than by the hook, and the clothes which the child could put on and take off by himself were good. But the mothers' behavior tended to be different from their consciousness to the ready-made children's wear and it was found that they did not use careful consideration when dressing a child.

This study showed the necessity to provide the cheap adjustable waist pants and skirts, the size indication by not only the height but also the height and the other body measurement, and durable and pretty design garments. It also suggested that the mothers should be educated to use careful consideration when dressing their children.

Key words : market research (市場調査), questionnaire survey (アンケート調査), wearing test (着用実験), buying behavior (購買行動), pressure (圧迫)

1. はじめに

諸外国では事故情報の収集分析が行われ、安全対策としての安全規格が制定されているのに対して、日本では事故情報の収集すら行われていないことに鑑み、東京都では 2006 年に子ども用衣類について、商品等の安全問題に関する協議会に調査研究を委託した。その結果から、フードや首まわりの紐が遊具に引っかかり窒息しそうになった例、長ズボンの裾上げ紐に躓き転んで手くびを骨折した例など数多くの事故が発生していることがわかった。しかし消費者のほとんどが親

の責任とあって苦情を申し出なかったという¹⁾。伊藤²⁾は同じ頃に子ども用ズボンのウエストゴムについて衣服圧の視点から長時間の圧迫が身体へ悪影響を及ぼす危険性を指摘し話題となった。また 2008 年 11 月 22 日の朝日新聞³⁾には幼稚園の滑り台で遊んでいた 3 歳女児の上着が手すりに引っかかって首が絞まり、意識不明になる事故が報道されていた。そこには女児が着ていたポンチョが滑り台の手すりにひっかかった他の幼稚園での事故例も掲載されていた。子ども服はとも

すれば可愛いらしさや流行している大人のデザインの模倣など安全性よりデザイン性が重視されているように見える。子どもは成長が早いので、経済的視点から大きめの衣服を着せる傾向もある。大きすぎる衣服はものに引っかかる危険がともなう。少子高齢化が進み、両親がともに働く時代を迎えて、保育園に預けられる子どもも多い。危険性のない衣服の必要性は高まるばかりである。まずは子ども服の安全性に対する生産者側、消費者側の意識を高める必要があると考える。

そこで本研究では幼児服の市場に出回っているズボンやスカートのウエスト部の形状について実態調査を行い、幼児を持つ母親の幼児服購入や幼児服に対する意識、子どもに衣服を着せることの現状を把握し、問題点を明らかにすることを試みた。

2. 資料および研究方法

1) 市場調査

2009年6～7月に伊勢丹、京王百貨店、GAP、BENETTON、無印良品、ユニクロ、イトーヨーカ堂、西友の東京都内8店舗の百貨店、専門店や量販店において、子ども用ズボンやスカートのウエスト部分の形式、ゴムの太さ、明きの位置、ゴム通し穴の有無を調査した。また実情を把握するために3～5歳児11名を対象にウエスト部の計測と着用実験を試みた。

2) アンケート調査

2009年10～11月に東京都内の1～7歳の幼稚園児および保育園児の母親372名を対象にアンケート調査を実施した。回収率43%で160枚の有効回答票を得た。質問内容は、購買行動4項目、着用状況2項目、幼児服に対する意識24項目、母親のライフスタイル8項目、および基本属性5項目である。回答者の7割は専業主婦、5割は幼稚園児の母親であった。

3. 結果および考察

1) 市場調査

幼児服下衣ウエスト部の形式は、①幅広のゴムが縫い付けてあるタイプ、②細いゴムが数本縫い付けてあるタイプ、③前中心のみ幅広のゴムが縫い付けてあるタイプ、④幅広のゴムが通してあり、両脇で長さが調節できるタイプ、⑤後ろ半分だけに幅広のゴムが通してあるタイプの5種類が展開されていた(図1)。①～③はゴムの長さの調節が不可能であり、④～⑤は

調節可能である。百貨店では調節可能な商品が多く、GAP、BENETTONなどの海外ブランドでは五分五分、量販店では調節可能な商品はほとんど見られなかった。百貨店に比べ量販店では商品単価が低いことも影響していると考えられる。

(1) 調節不可能タイプ



(2) 調節可能タイプ

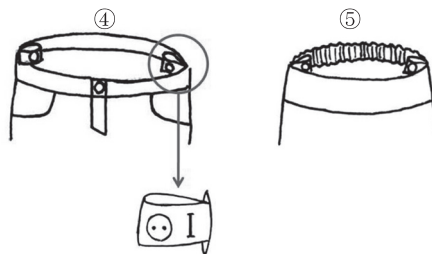


図1 市販下衣のウエスト部の形状

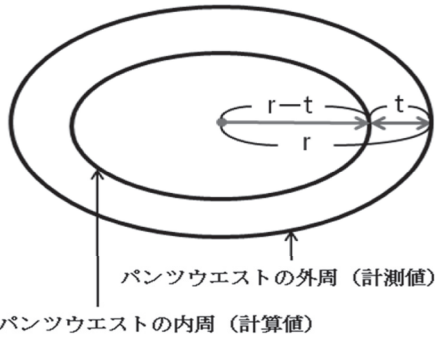
2) 着用による身体への影響

着用したあとウエスト部に何らかの支障が出たかとの質問の結果は、ウエストゴムの影響で赤くなった経験やかゆみが出た経験が16%の回答者に、着脱時のウエストにゴムの痕が付いている経験は40%の回答者に見られた。動いても落ちないようにとの配慮や市販品のサイズによる選択購入の結果、きついウエストゴムの下衣をはかせていることが予測される。すなわち既製衣料の幼児服のサイズ設定が身長のみで決められているので、市販品も身長表示だけがなされている。そのため同じ身長でも太めの子どもにはきつくなる可能性がある。

3) 市販ズボンウエスト部の締め付け

そこで市販品の下衣の締め付け具合を検討するために、3～5歳の幼児11名を対象に適合サイズの市販ズボン着用実験を行った。簡便法(図2)でズボンウエスト部の内周を計算し、身体寸法の胴囲と比較して締め付け具合を検討した。表1のようにほとんど締め付けていないものから6.1%、約3cmも締め付けているものがあつた。このことは、市販のズボンやスカートではウエスト部のゴムの長さを調節できるタイプに

する必要性を示唆するものである。



ウエストを円周とモデル化して着用時の内周を算出した。

外周：パンツ着用上の周囲長(計測値)

内周：パンツ着用上のパンツ内側の周囲長 (計算値)

$r(\text{cm})$ ：外周 $\div 3.14 \div 2$

$t(\text{cm})$ ：パンツウエストの厚み (厚さ測定値 10 回の平均値)

内周： $2 \times 3.14(r-t)$

図 2 パンツ着用時のパンツウエスト内周の算出

表 1 着用実験結果

ID	歳	ヶ月	パンツサイズ	ウエスト 実測値 (A)	ウエストパンツ 内周計算値 (B)	実測値との差 (A-B)	実測値に対する 締め付けの%
1	4	8	100cm	48.5cm	46.9cm	1.6cm	3.3%
2	5	2	110	49.0	48.9	0.1	0.2
3	4	11	100	47.0	45.9	1.1	2.4
4	5	4	100	45.0	45.4	-0.4	-0.8
5	4	11	100	48.0	47.9	0.1	0.3
6	3	7	100	49.0	47.9	1.1	2.3
7	4	5	100	51.5	48.4	3.1	6.1
8	5	0	110	46.5	46.4	0.1	0.2
9	5	5	110	54.5	52.4	2.1	3.8
10	5	11	110	50.5	49.9	0.6	1.2
11	4	11	100	48.5	47.4	1.1	2.4

4) 母親の幼児服購買行動

次に母親の幼児服購入の実態について検討した。幼児服を購入する際に重視する点について1～3位までを選択してもらった結果、価格、デザイン、サイズ、素材、機能性の順に重視している(図3)。また購入する店舗を3つ選んでもらった結果では、量販店が最も多く、通信販売(インターネットを含む)、百貨店、アウトレットが順に続く(図4)。幼児服購入時に配

慮する点について5段階評定尺度で質問した結果では、子どもの性格や遊ぶシーンを考え、少しでも着られる期間が長い幼児服を選んでいる(図5)。購入または着用している下衣のウエスト部分については、調節不可能な幅広のゴムを通してある形式が最も多く、幅広のゴムを縫い付けてある形式が続く(図6)。以上のことから母親は、機能性より経済性やデザインを優先し、量販店や通信販売で幼児服を購入していることがわかった。

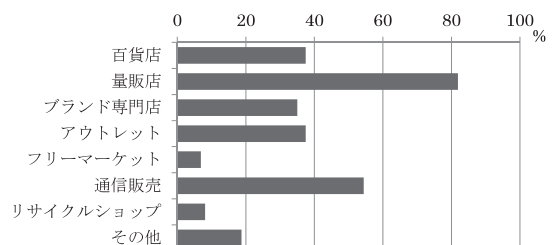
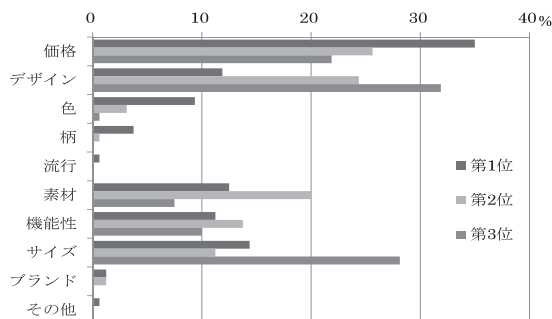


図 3 幼児服(ズボン・スカート)購入時に重視する項目

図 4 幼児服の購入店舗

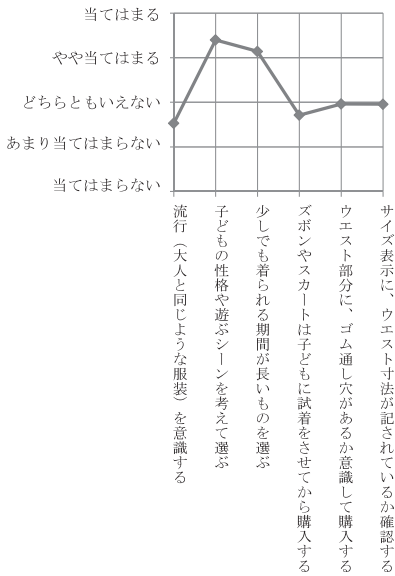


図5 幼児服購入時の行動のプロフィール

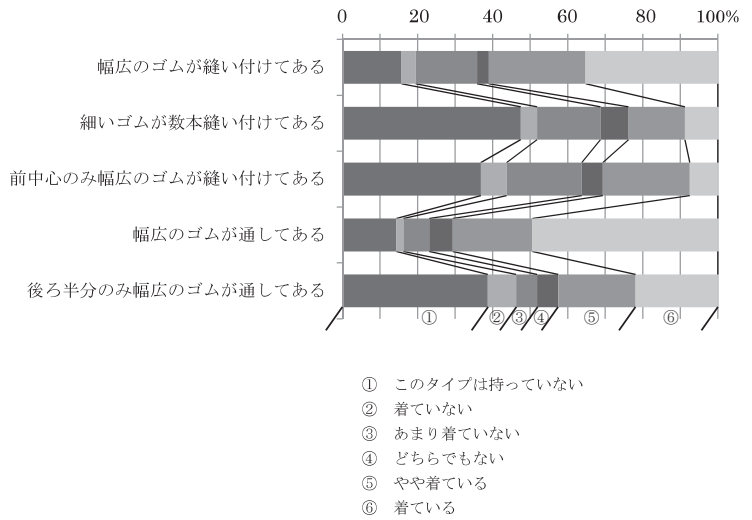


図6 着用しているズボンウエスト部形状の状況

表2 幼児服に対する意識 24項目 5段階評定尺度の平均値

項目	平均値
1. ズボンやスカートのウエストが落ちてきてしまうことがよくある	3.45
2. ウエストがきつくなった服を、子どもの成長に合わせてゴムを付け替えている	2.33
3. 子どもが昼寝をする際、ズボン又はスカートをゆるい服に着替えさせている	2.61
4. ウエスト以外は問題がなく、まだ着られる服でも、ウエストがきつくなってしまった、あるいはゴムが伸びてしまい着られなくなるということがよくある	3.16
5. ウエスト部分は問題ないが、丈が短くなってしまい着られなくなるということがよくある	3.83
6. 一度しか着用していないが洗濯をしたことで縮んだ、あるいは型が崩れて着られなくなるということがよくある	1.95
7. 一度しか着用していないが破れた、あるいは糸がほつれたということがよくある	2.13
8. 流行を意識することで、着用期間が短いということがよくある	2.00
9. ビーズ刺繍などの飾りは危険だと思う	3.01
10. ローライズの子ども用ズボンを着用させたいと思う	1.93
11. ウエストゴムに切込みが入っていて、任意の位置にボタン留めをして調節ができるゴムは便利だと思う	4.34
12. ウエストゴムがミシンで縫いつけてあるタイプは調節不可能なので、あまり購入しない	3.18
13. 乳幼児向けの全ての服に、ウエストの調整金具は付けた方が良くと思う	3.09
14. ウエスト金具が硬いボタンホールのものより鉤ホックの方が良くと思う	3.55
15. ズボン又はスカートのウエストはホックのものより総ゴムの方が良くと思う	3.71
16. オーガニックコットンの幼児服を好んで購入することが多い	2.15
17. オーガニックコットンのカラーバリエーションが増えると良いと思う	3.21
18. オーガニックコットンの幼児服は価格が高いと思う	4.20
19. 価格が安ければ、なるべくオーガニックコットンの幼児服を購入したいと思う	3.72
20. 幼児服で使用する綿は全てオーガニックコットンにした方が良くと思う	2.84
21. 幼児服のサイズ間隔は身長を5cm刻みにした方が良くと思う	3.41
22. 幼児服のサイズ表示は身長以外にもある方が良くと思う	3.54
23. 幼児服は全体的に価格と質が不釣り合いだと思う	3.14
24. 子どもが自分で着脱できるような服が増えると良いと思う	4.16

5) 母親の幼児服に対する意識

母親の幼児服に対する意識 24 項目の集計結果からは、ウエストが調節可能なゴムの下衣、ウエスト留め具はボタンよりカギホック、下衣のウエストはホックより総ゴム、子どもが自分で着脱できるような服をよいとしている。またオーガニックコットンの幼児服は価格が高いが、安ければ購入したいと考えている。一方、一度の洗濯で縮んだり、破れたり、ほつれたりした経験はなく、流行を意識することで着用期間が短かったり、ローライズのズボンを着用させようとは思っていない。しかし、きつくなった下衣を子どもの成長に合わせて「ゴムを付け替えている」、「昼寝をする際に下衣をゆるい服に着替えさせている」、「ビーズ刺繍などの飾りは危険だと思う」に対しては「どちらともいえない」の回答が多かった(表 2)。これらの結果からは、意識としてはウエスト部が調節可能なものがよいとしながらも調節不可能なズボンを購入し、経済的理由からオーガニックコットン製のものをよいとしながらも購入しないという意識と実態とのずれが見られた。また大人と同じような流行を追わない、一度の洗濯で着られなくなるようなものを購入しないなど、幼児服のあり方を考えているように見える一方で、成長に合わせてウエストゴムを付け替える、昼寝をする際に下衣をゆるい服に着替えさせるなどの細やかな配慮は意識されていない事がわかった。

4. まとめ

幼児用下衣(ズボン、スカート)のウエスト部の形状に関して、市場調査による市販品の実態、着用実験による市販品ウエスト部の締め付け具合、アンケート調査による母親の消費行動や幼児服に対する意識について検討した結果次のことが明らかとなった。

1. 市場調査の結果、幼児服ウエスト部の形状には調節不可能なもの 3 種類、調節可能なもの 2 種類が見られた。百貨店では調節可能な商品が、量販店では調節不可能な商品が多く売られていた。
2. 市販ズボンの着用実験の結果、適合サイズの商品でも子どもによってはかなり締め付けが強いものがあり、ウエスト部の調節可能な仕様の必要性が示唆された。またズボンの着用実態調査からは、ウエストゴムの影響で着脱時にウエストにゴムの痕が付い

た経験を 40%の回答者がもち、きついウエストの商品をはかしていることが予測された。

3. 母親の消費行動や幼児服に対する意識に関するアンケート調査結果からは、購入に際しては、量販店や通信販売を利用することが多く、また経済性やデザイン性を重視して機能性をあまり重視せずに購入していることがわかった。幼児服のウエスト部については、調節可能なゴム製、ウエスト留め具としてはカギホック、ホックよりは総ゴム製、子どもが自分で着脱できるような服をよいとしている。また意識としてはウエスト部が調節可能なもの、オーガニックコットン製のものを良いとしながらも、調節不可能なものを購入するなど意識と実態が異なる傾向が見られた。さらに成長に伴いウエストゴムを付け替えることや、昼寝をする際に下衣をゆるい服に着替えさせるなどの細やかな配慮はあまり意識されていないことがわかった。

以上の結果からウエストゴム調節可能な安価な下衣、身長だけでないサイズ展開、着脱しやすく丈夫で可愛いデザインの幼児服の提供が必要とわかった。それと同時に幼児の衣生活に対する母親の細やかな対応意識の育成の必要性が示唆された。

引用文献

- 1) 東京都生活文化局 報道発表資料 2007.3.19
- 2) 伊藤紀子 日本衣服学会誌 Vol, 50, No.1, 2006
- 3) 朝日新聞記事 2008.11.22